

## シンポジウム開会のご挨拶と趣旨

(永田)

こんにちは。未来の図書館研究所長の永田治樹と申します。ひとことご挨拶を申し上げます。おかげさまでこのシンポジウムも今年で第4回目を迎えました。ひとえに皆さまのご協力、ご支援の賜物だと存じております。早いもので、本研究所も一つの節目となる3年が過ぎてしまい、今年4年目となっております。日々のあれこれに忙殺されているばかりでなかなか思うようにはことは運ばないのですけれども、これからもこのようなシンポジウムを皆さまと共に開催していきたいと思っています。今後ともどうかご指導ご鞭撻のほどよろしく申し上げます。簡単ではございますがご挨拶にかえさせていただき、私はこの会合のコーディネーターでもありますので、ここからその役割を務めます。

少しスライドを使い説明いたしますので、座らせていただきます。本シンポジウムの構成は、まずは私から20分足らず、その趣旨についてお話をいたしまして、そのあと、こちらにお座りのお二方のパネリストからお話を頂戴します。そして、間に20分程度休憩いたしまして、その後ディスカッションを1時間という構成にいたしたいと考えております。

本日のテーマは、スライド(図1)に映しているように「図書館とランドスケープ」というテーマでございます。タイトル画面の画像は、ご存じの方も多いと思いますが、福島県白河市の図書館の外観です。JR白河駅の近くにありまして、小峰城という城郭を臨む見晴らしのいいところにあります。設計者の説明には、「地域のコンテクストを意識して開口部を定め、季節・時間の変化を感じられる滞在型の図書館となること、開放的なランドスケープとして市民に開かれた活動・交流の場となることを目指した」とありました。この図書館では、外も内もなかなか良質なランドスケープを味わうことができます。



図1 白河市立図書館

そこで今回のシンポジウムが、なぜこのテーマであるか、そしてこのテーマでなにをみるかという点を少し説明させていただきます。スライドの写真（図2）は2018年12月4日に開館しましたフィンランド、ヘルシンキの中央図書館 Oodi です。今年（2019年）の IFLA、世界図書館連盟の大会で Public Library of the Year を受賞しました。全体は1万平米ほどの大きな建物です。この写真の部分は3階、最上層階の光景であります。図書館の基盤エリアといってもいいですが、それを右端からと、左端から撮ったものです。右側の写真が成人のエリアから撮ったもので、左側の写真が子どものエリアから撮ったものなので、両方合わせると3階の空間がつながるのですが、真ん中にカフェがあって、また外にはテラスがあります。とても優れたアコースティックで、子どものエリアがあったりカフェがあったりするのですが、ざわつきもなく、人々が思い思いに自分の素敵な時間を過ごすことができる図書館です。



図2 ヘルシンキ市立中央図書館 Oodi

さて、ランドスケープとはなにかという問いをまずはクリアにしていきたいと思います。

日本では当初植物学とか地理学とかいった領域で導入された概念です。同じ意義のドイツ語 *landschaft* という言葉がありますが、それと同じく景観と訳したようですね。その後建築学とか、あるいは造園とか都市計画などの分野で広く使われるようになりました。ランドスケープとは、「土地や地形といった自然的な要素と、人工の要素の部分をあわせて全体として目にみえる特徴」をいっていると思います。景観という日本語でもいいのですが、日本語の場合、言葉が少しスタティックになってしまうといいますが、静止したイメージになってしまいますので、そのもっている機能的な意味を失わないためにカタカナを使っています。ランドスケープとはなにかということですが、自然と人工物が合わさった全体としてみたときに、みえてくるものということですね。スライドの写真は、単なる一つのランドスケープ写真です。フランスのアルビというまちの、タルム川という河畔につくられた庭の写真です。

さて図書館にとってのランドスケープを文献で少しどってみますと、実に古い歴史があるようで、これは建築家のピーター・ジソルフィー（Peter Gisolfi）という人が書いたペーパーで拾ったのですが、ローマ時代のキケロの手紙のなかにこんな文句があるといわれています。「もしあなたの図書館のなかに庭があるなら、なにも欠けたところはない」。図書館では読書だとか思索だとかあるいは執筆だとか、さらにその過程のなかで同僚と会話することもある。そのためには庭といったランドスケープが不可欠であるとキケロはいつているのだとジソルフィーは指摘しています。

中庭をもっているような図書館は、いろんなどころにあるとは思いますが、彼は典型的な庭がある図書館として、ニューヨーク公共図書館を挙げていました。「えっ、図書館のなかじゃないよ」と思われる方も多いでしょうが、スライドの地図のように図書館の裏にブライアント公園というのがあります（実はこの庭の地下は書庫になっています）。かなり大きな公園で、そこには花壇もありますし、レストランやカフェもありますので、人々がくつろげるということで、図書館の閲覧室を抜け出して公園へ行けば、公園のランドスケープを楽しめるというわけです。

庭によって人は安らいだり会話を弾ませたりすることができる。つまり庭というランドスケープが、視覚を通して人々に働きかけてくるというわけですね。ランドスケープから「いい眺望だ」と、人々は感動を受けたりします。あるいはそのランドスケープがもつ意味や価値を汲み取ることができ、それを自分の行動に結びつけるというようなことにもなります。

ちょっと話が違いますが、アメリカの心理学者でジェームズ・ジェローム・ギブソン（James Jerome Gibson）という人が、アフォーダンスという言葉を取り上げています。アフォーダンスというのは、環境が動物あるいは人に働きかけるということです。人を取り巻くランドスケープもそのように私たちに作用するのです。図書館のランドスケープは、一つに図書館の景観として、自然景観、地域の景観、そして建築家の設計による側面からみてとれます。それにもう一つに、図書館が情報を提供するという役割に注目すると、図書館のランドスケープでは情報の景観という観点を取り出せます。したがって私は、図書館のランドスケープという議論は二つの観点でできるかなと考えました。

スライドは、またこれも有名なストックホルムの市立図書館の写真です。圧倒的なこの壁面の蔵書、この様相に対峙して私たちはどんな気持ちになるか、どんな感情がひき起こさせられるでしょう。通常は、蔵書のもつ知的な活動に誘われるかと思います。

さて、なぜ今ランドスケープなんかを問題にするのかを少し説明させてください。これを取り上げるようになった理由は、近年わが国の公共図書館でも、1970年代につくられた座席の少ない貸出図書館から、ちょっと言葉は古いけれども滞在型の図書館に変更され、安らいだスペースが望まれるようになりました。改めてこの側面を強く意識し始めています。図書館により快適な空間が求められ、また人々が集える要素が求められている。これが第一の理由です。

もう一つは、先ほども少し申し上げましたが、情報の景観が資料のデジタル化によって、実は物理的には捉えられなくなっていますね。電子的な資料はこれまでのように書架には並べられません。本と同じようにはランドスケープを構成しません。だから新たな図書館のなかの情報景観をどのようにつくっていくかということも、留意しなければならないというのが第二の

理由であります。

図書館のランドスケープをどう設定するかが、今回のシンポジウムのポイントです。本日みつけたいところは3点あります。図書館のランドスケープをどうつくるかは、図書館がどのような役割を果たすのか、ということによって決まるのですが、図書館は単なる公共貸本屋のような役割ではなくて、人々の学びや交流や、あるいは気晴らしの場でもあります。そのような図書館のあり方を踏まえて、設計のランドスケープを構想します。その部分について今日は建築家の伊藤麻理さんに、どのようにランドスケープを構成されたかの実際を語っていただけることになっています。

スライド(図3)は、デンマークのオーフスの市立図書館の写真です。全体が斜面の空間、2階から3階にかけてランプがつくられています。ここに、5面のイベントスペースがあります。左右にジグザグになっているスロープは、ベビーカーを通すためです。で、5面それぞれでもイベントができるし、全体を一緒にしてもイベントができるようになっていきます。私もこの画像をみてなんだろうと思っていました。こういうイベントスペースが、図書館の中央部分にあるのです。一体この図書館はなにをしているのだろうと思ひまして、この夏に調査にしてみました。



図3 オーフス公共図書館 Dokk1 のランプ

これは、市民がさまざまな活動、イベントを開くためのものでした。それが図書館の中心部分で行われる。そのように人々のイベントを位置づけているということでもあります。実はこのような市民活動を支える設計と、コミュニケーションセンターとしての機能が評価されまして、ヘルシンキ中央図書館に先立つ2016年のIFLAのPublic Library of the Yearをこの図書館が受賞しています。

先ほどは、図書館のランドスケープを二つに分けて説明したのですが、二つの区分ですと両方にまたがる部分がある。単に居心地のいい空間というのではなく、読書や活動をするのに適合している空間、つまり図書館の機能を果たすのに居心地のいい空間であり、同時に図書館の情報を提供するのによい空間、つまりコレクションそのものを利用しやすく並べるかといった問題があります。そういう中間領域があります。サービスやコレクションのためのしつらえですね。

これは最初の伊藤さんのところにも関わるし、次の森山さんのところにも関わるのです。図書館としては、サービスとコレクションのしつらえという局面も考えなければならない。資料をどう展示するか、資料をどのように発見させるかというところを考えなければならないというところ。スライドは、高知県の梶原町立図書館の写真です。この梶原図書館はとても素晴らしい図書館です。隈研吾さんの設計でこの内部のコレクションのしつらえをプロデュースしたのは、一昨年私どものシンポジウムにご登壇いただいた太田剛さんです。今日は太田さん

にいらっしやっただいておりますので、あとでちょっとご発言をお願いするつもりです。

三つ目は、先ほど説明しましたように、ランドスケープは物理的な景観だけでは不十分になってきました。インフォメーションランドスケープという言葉が 20 世紀の終わりくらいに使われ始めました。どういうコンテキストかというと、物理的な資料とデジタル資料が混じった図書館、ハイブリッドライブラリーという概念はご存じかと思いますが、そういう図書館になっていきますと、ある種の領域は本当に電子化してしまうのですね。日本の公共図書館ではまだみえてきませんが、大学などの学術図書館に行きますと、雑誌の棚がガラガラになっています。電子図書もかなり増えて、電子図書、電子ジャーナル、電子マガジンが多くなってくると図書館の様相が変わってくるのです。わが国の公共図書館はそういう意味ではかなり状況が出遅れているのですけれども、そういうことが予想されます。そういう状況になった場合、情報をどのように可視化するかという問題が出てきているわけです。

それに関して、日本では珍しく公共図書館でもこのあたりのことを先進的に取り組まれた岡山県立図書館がありますが、その岡山県立図書館でこの 3 月まで働いていらっしやった、森山さんにこのあたりのお話をさせていただこうと思います。

以上が本日のシンポジウムの趣旨であります。早速お二方にお話をお願いしたいと思いますが、伊藤さんと森山さんについて少しご紹介をいたします。

伊藤さんは大学で建築学を修めた後、オランダに渡って経験を積まれ、その後 UAo という会社を設立され、その代表をなさっていまして、建築とランドスケープの融合を目指して活躍されていらっしやいます。図書館についても大変深い理解をもって取り組まれておりますし、昨今では、Web で拝見したのですが、民間資金を活用した官民連携による社会解決の仕組みとして、SIB (Social Impact Bond) というものにも取り組まれていると聞きました。大変楽しみな若い世代の方です。

一方森山さんは、国立国会図書館に勤務された後、岡山県立図書館で長らくお仕事をなさっておられた方で、岡山のデジタル図書館「デジタル岡山大百科」というものがあるのですが、その事業を立ち上げられて、その発展にご尽力なさいました。岡山県立図書館は、実は県立図書館ではとても活動が活発な図書館で、県立図書館としては全国一貸出が多いとかいろいろあるのですが、こうした先進的な取り組みをなさっている図書館です。

それでは、伊藤さんのご発表をお願いしたいと思います。

---

---